



episode.05

発見！奇跡の出土品 Donguri！ ～縄文遺跡からみえる自然との共生～

話し手 始良市教育委員会社会教育課

ふかのぶゆき
深野 信之さん（昭和48年11月26日生）

聞き手 鹿児島県立川薩清修館高等学校

2年 石神 琴美

2年 石崎 芭奈

2年 柳 美瑠紅

「前田遺跡とは」

前田遺跡は始良市の住吉地区にあります。田んぼの区画整理がきっかけで発見されました。この遺跡は、通常は分解されて発見されない Donguri や編みかごなどが、保存状態の良いまま奇跡的に残っていた遺跡なんです。

なぜ残ったかという、Donguri などが、水や粘土にパックされて酸素に触れなかったために、腐らずにそのままの形で残りました。私も Donguri を最初に見た時は「誰かがどこから持ってきたんじゃないか？」って思うくらい、フレッシュでした。ただ水から出して酸素に触れると10分もしない内に黒くなったんですね。

Donguri は、土坑という穴の中で発見されて、その穴が72基、見つかりました。Donguri の個数は、11万個以上です。縄文の人々は、Donguri を森から採ってきて穴の中に貯蔵目的で入れたと言われていました。だけど最近では、虫に食われた Donguri を、水で選別するための穴ではないかと言われています。虫に食われた Donguri は、水の中にいれると軽いのでプカプカ浮いてくるんです。

どっちにしても縄文の人が穴に入れていた Donguri は、洪水などの影響で土に覆われてしまったものだと考えられます。

「出土品の特徴からわかること」

出土した Donguri の99%以上がイチイガシという樹木の Donguri です。このイチイガシ、出土した編みかごの材料にも使われていました。

イチイガシという木をテープ状にわざわざ割いて、作ったものです。すごい手間がかかるんですね。もう一つ面白いのが、この編みかごを作る時には、大きくなったイチイガシは硬くなりすぎて使えないんです。だから、直径が10cmくらいの幼木を使っていたみたいです。でも、Donguri を採取するためにはイチイガシが大きくなないと実がならない。もしかしたら、縄文人は自分たちでイチイガシを栽培して、Donguri 採取用の大きい木と編みかご用の小さい木を管理して、使っていたのかもしれないと思います。

他にも土坑の中から、ベリー類の種も見つっています。そうするとお酒みたいにしたのかな、ジュースみたいにして飲んだのかなという風に縄文人の食生活が想像できる、そういう情報が詰まっているのが前田遺跡ですね。



「発掘調査とは」

発掘調査というのは外で掘ってきて終わりじゃなくて、出土品と穴を埋めていた周りの土ごと持って帰ります。そして、土の中に何があるのか調査します。虫眼鏡などを使って、見落としがないように細心の注意を払って分類していきます。私は老眼なんですけど、本当に大変な作業です。(笑)

土坑からは虫の羽や、シジミやカラスザンショウなども見つっています。土坑の周りから動物の骨なども出土するので、動物を解体していたかもしれない。細かく丁寧に分析することで、縄文人の生活の様子がわかっていきます。

土器の破片があれば復元作業もします。調査した物や復元した物は資料館に展示したり貸し出したりして、皆さんに知ってもらおう作業も行っています。



「昔も今も人々を支える住吉池」

縄文人にとって住吉池周辺は、住みやすい場所だったんだと思います。当時の人は小高い丘などに住んでいることが多いです。低地だと川が氾濫して住めなくなるからです。住吉池周辺は山もあり、森もあり、川もあって漁ができて水源となる池もあったので住みやすかったのですね。

そして住吉池の水は、江戸時代から現代まで農業用水として私たちの生活に使われています。

「文化財を未来へ繋ぐ」

私がこの仕事で嬉しい瞬間は、資料館で復元した物や展示した物を、皆さんが見て「なるほどね」とか、「こういうのがあったんだ」という風に少しでも想いを馳せてくれる時です。

「始良ってこういう歴史がある街なんだ」というのを子供たちの頭の片隅に入れてもらって、将来どこかで思い出してくれればいいなと思います。

